オカメインコの飼い方

山口大学農学部　早崎峯夫

オカメインコは話し好きの実にかわいい小鳥で、世界中でペットして愛されている。オカメインコは本来、群れで生活する鳥で野生のオカメインコは、低木の茂みや森林地帯で、木々のくぼみに巣を作って生活している。森のなかで無数の野生のオカメインコが黄色い冠毛を日光にきらめかせて、木々の間や梢の上を飛び回っている姿に出会うことがある。彼ら木の実、昆虫、花の蜜などを好み、これらの餌が豊富にある場所で生息している。

さまざまな毛色

オカメインコは飼われ始めたのは19世紀の中ごろの主にヨーロッパからであるが、次第にカラフルな品種へと改良されていった。

“灰色オカメインコ”は標準的な野生のオカメインコである。品種改良され、次第に白毛から深い淡黄色に変化し、冠毛が黄色で、耳の部分に大きいオレンジ色の斑状の毛が見られるようになった。

“斑状まだらオカメインコ”は、冠毛が黄色で、体毛は淡黄色で、耳の周辺は斑状の灰色を呈している。とくに、全体的に青黄色で、羽の肩の部分に暗灰色の斑があるものがよいとされている。

“パール斑状まだらオカメインコ”は“斑状まだらオカメインコ”に似ているが、肩と、ときに背中に、美しい黄色の輝きをもつ真珠模様がある。

“パールオカメインコ”は、体毛は暗灰色で、背中と翼が羽根の先端部分に向かって美しい輝きのある黄色あるいは白色を呈している羽毛で覆われている。

“シナモンオカメインコ”は目立つ淡い黄褐色をしている。

“シナモン斑状まだらオカメインコ”はシナモンと淡黄色の美しい組み合わせをしている。

“シナモンパールオカメインコ”は、体毛は暗灰色であるが、羽根の先端に向かって黄色の真珠模様をもち、次第に淡黄褐色へと変化してくる美しい鳥である。

“シナモン斑状まだらオカメインコ” も“シナモンパールオカメインコ”も、ともに灰色あるいはシナモン(淡黄褐色)の“線の入った”黄色い冠毛と尾羽を持つ。これらの品種では、雌鳥は常にきれいな毛色を保ち続けるが、パール系の雄鳥はたいてい先祖返りするか、あるいは成鳥になった時に褐灰色に変化してしまう。しかし、“シナモンパールオカメインコ”の雄鳥は非常に美しい明るい灰色に変化する。したがって、パール系のオカメインコでは成鳥になれば雌雄が簡単に見分けられる。

“ファロウ オカメインコ”は非常に薄い淡黄褐色あるいは黄色をしているが、めったに見られない。

“ホワイトフェイスオカメインコ”は、体毛が灰色で顔面は白く、白と灰色の冠毛を持つ。雌鳥は普通の雌鳥のように灰色の冠毛を持っている。最近では“ホワイトフェイスオカメインコ”が主流になり始めている。

“銀色オカメインコ”は非常に明るい灰色と白色の羽根により銀色に輝くように見える美しい突然変異で、その冠毛は黄色と灰色である。

“ルチノパールオカメインコ”で、冠毛は黄色で、体毛は白色で、黄色真珠の毛色の斑状模様を持つ。

選び方と買い方

オカメインコの寿命は長く、平均寿命は約 15 年、最長 27 年間も生きたことが知られている。繁殖能力も長く、10 歳や 12 歳になっても十分に交配できる。さえずりとおしゃべりを訓練して楽しむにはできるだけ若い鳥が適している。成鳥では訓練してもなかなか憶えてくれない。

オカメインコを購入する時は、活発で機敏で目の輝いている鳥を選ぶ。おとなしくて目に力のない鳥は、一番に避けるべきである。もっとも、選ぶときは繁殖家あるいはペットショップの店員さんに直接尋ねたほうが早い。鳥小屋の中の鳥を選ぶ場合は、活発に飛んでばかりいるものを選ぶ。鳥小屋でいつも柱や桟を登ったり歩いたりしている鳥は避けたほうがよい。それに肛門が清潔で乾いている鳥を選ぶことも健康を確認する上で重要である。胸の骨が突き出ているような鳥も避けるべきです。止まり木に止まるときは、いつも止まり木の前方と後方をそれぞれ 2 本ずつの鉤爪を揃えてしっかりとつかんでいるものが良い。また翼は臀部で交わって閉じられていて垂れ下がっていないものがよい。健康なものは、鼻翼は完全に乾いていて、目は輝いており、目やにも出てない。健康な鳥の羽は滑らかで体にぴったりついている。“羽毛がふくらんでいる鳥”は体調が悪い場合が多い。

鳥の尾は“舵”であり、もしその尾羽がすべて失われてしまったら正確に飛ぶことが出来ない。何かの原因で失われた尾羽が再び生えそろうのに少なくとも 3 ヶ月はかかる。購入したばかりの鳥を鳥小屋で飼うときは、その日は、水と餌をおいた鳥かごでまず一晩飼い、朝になったら鳥小屋に移してやる。ショップや鳥の繁殖家から購入したばかりの鳥は急に慣れない場所においたり、とくに夜遅くて回りの状況が見えないときにすぐに新しい環境においたりすることを決してしてはならない。

住まい

オカメインコに適して住まいとしてはペットショップで売っている鳥かごが適したものの一つである。鳥かごの広さは鳥が翼を広げることができるための十分な広さが必要である。オカメインコはセキセイインコのような他の種類のペットの鳥とは異なり、より広い空間が必要である。例えば室内を自由に飛び回わったり室内に止まらせておくなどして、鳥かごの外で費やす時間を多くしてやる。したがって、鏡、ブランコ、はしご、そしてお

もちゃなどの鳥用玩具を買い揃えてやることはほとんど必要なく、１，２本の止まり木を鳥かご内に入れておけば十分である。“チューブ”タイプの水入れと餌入れはオカメインコには適してなく、むしろ鳥かごの内側にクリップで留める普通の蓋なし餌入れのほうを喜ぶ。なお、カナリヤやセキセイインコのために作られた鳥かごのほとんどはオカメインコにとって十分に広いとはいえない。

鳥かごを置く場所は、すきま風があたらず、日光が良く差し込む明るい部屋がよい。ただし、日光が直接当たる場所は避けてやる。夜間は電灯のついた居間であっても彼らが眠ることが出来るように鳥かごには薄い素材の暗い色の布で覆っておくのがよい。

いっぽう、何匹か飼って繁殖させたいときは鳥小屋が必要である。1組のつがいを繁殖させたいときに必要な小屋の広さは、少なくとも 90cm 四方で高さが 180cm ほどで、扉と窓のある小屋が必要である。なお、冬には 1.5cm 幅の止まり木 1 本と餌棚を備え付けることも必要である。また、休憩するための四角い棚の取り付けも必要で、この棚の周辺は低い囲い板を塀のように取り付けておく。棚のどこか適当な 1 ヶ所の角は囲い板を切り取って、鳥の体幅程度のすき間を作っておき、鳥が飛び立ちやすいようにする。また、着陸するために外へ突き出た板と着陸後に身を隠せる遮蔽版を持った簡単な巣箱も小屋の奥に作り付けておくとよい。最もよい鳥小屋のサイズは横 270cm 縦 90cm 高さ 180cm である。鳥が風雨にさらされないようにするには、内側にベニヤ板を内張りして仮止めしておくだけでもよい。また屋根の下 7.5cm 程度の空間にガラス繊維内装材を貼り付けておくのも悪天候から隔離してやるのによい。さらに冬には、“飛び場”の空間をポリ塩化ビニルの波型板で覆ってやるのも保温に良い。

嵐で小屋が吹き飛ばされるのを避けるために、鳥小屋を建てるときに柱を基礎のセメントに 15cm の深さで埋め込んでおく。また、鳥小屋の床を板敷きにすると害虫に食い破られるおそれがあるので、床面は地面にじかに砂を層状に敷き、その中に小石を敷き詰めて舗装しておくとよい。

鳥小屋を自分で作ろうとするならば、既成品のパネルで十分である。それらは安くて、簡単に建てられて、どこでも売っている。人の出入り口は“飛び場”にいる鳥を逃さないために二重ドアの玄関(安全帯)にしておくのが望ましい。小屋の奥の止まり木は“飛び場”のそれよりも高く設置しておく。夜には、鳥たちはたいてい高い止まり木に止まるからである。“飛び場”にはリンゴ、ブナ，あるいはヘイゼルナッツのような実のなる自然の木を植えておき、止まり木に利用するのもよい。しかし、針葉樹や幹にとげを持つものなどは鳥の体を傷つけやすいので使ってはならない。ただし、飛ぶための自由空間は十分に残しておくことである。理想的な水入れ容器は小屋の庭のどこからでも見つけられるような 7～8cm 程度の深さの長方形のプラスチック容器でよい。若鳥が巣立ったときには、彼らが乗ることが出来るように、容器の中に平らな石を置いておくとよい。

電灯の光は、“夜間飛行”するときにたいへん役立つ。冬に餌の時間を延長させるためにも電灯は役立つ。光量調節器やタイマースイッチは飼い主にとってもと鳥にとっても快適

に過ごすのに役立つ。さらに低ワットの電球も一晩中点けっぱなしにしておけるので、役立つ。全ての電気のコードは、間違いなく鳥についばまれるので、確実に保護対策をとっておくべきである。

給餌

鳥たちの餌の種類と質は、非常に重要である。ペットのオカメインコで一番買われていくのはとても若齢のものである。したがって、給餌については必ず店員さんに聞いておかなくてはならない。しかし、ペットショップの店員さんの話はかなり専門的な場合もあり、必ずしも一般の飼い主にも役立つとは限らない。そこで、この本ではいくつかの飼い方を参考知識として解説する。

どの年齢でもペットのオカメインコでも基本的なものは、カナリヤシード(カナリヤグラスの種子)ときびの実含む良質のセキセイインコミックスとよぶ配合した餌を購入して、これにヒマワリの種子を混ぜた餌である(つまり 2/3 をセキセイインコミックス、1/3 をヒマワリの種子)。それに各種の砂の混合砂（グリットミックスという）と牡蠣の貝殻粉砕物を別の鉢に入れて床の上においておく。そして魚屋でコウイカを買ってきてその新鮮で清潔な骨そのものを鳥かごの格子に通してきつく留めておくか、あるいは針金で柱に固定しておく。骨を固定するのは動かないようにしてついばみやすいようにするためである。春キャベツや冬のキャベツ(curley kale)、夏のハコベ、加えてセロリの破片やニンジンの尻尾のような野菜を毎日供給することは最も重要である。また、オカメインコはリンゴも食べる。

ヒナ鳥は餌を上手に食べられないので、水に 24 時間浸けて細かく砕いたヒマワリの種子を与えるとよく食べてくれる。ヒマワリの種子はペットショップ以外でも健康食品店でも買うことが出来る。水と牛乳に浸してほぐしたパンもまた若鳥がよく食べてくれることもある。鳥に少量のチーズや薄味のケーキあるいはビスケットの小片のようなものを与えることもまた害にはならない。さらに、ヘイゼルナッツやヤナギの枝を好む。ヤナギの枝は芽を残して葉を除き、よく洗って与えると芽も樹皮も食べてくれる。

鳥小屋で飼われているオカメインコの餌は基本的に鳥かご飼育の餌と同じであるが、このほかにセイヨウアブラナの種子、亜麻の種子、カナリヤシードおよび麻の種子が含まれている“カナリヤミックス”とよぶ配合した餌をくわえていくことは冬の寒さに乗り切ってもらう栄養の供給にて適している。良質の砂と牡蠣殻のグリットミックスは常に与えておく。また、コウイカの骨も常に用いる。コウイカの骨の与え方は、小屋の乾いた場所に頭をとった釘を 2 本打ち込んで、それに新鮮で清潔なコウイカの骨を立てるように突き刺して固定する。もしイカの骨が濡れて汚れていれば、オカメインコは食べようとはしない。イカの骨は卵を産むことや骨形成のためのカルシウムの供給源として餌の必須要素であり、雛の成長に非常に重要である。

ニンジン、セロリ、春キャベツそして冬のキャベツ(curley kale)など毎日与える野菜は

釘に挿したり、針金で固定して吊るすとよい。夏には種子ができているタンポポの花(茎ではなく)、そして非常に若い葉、たとえば、ヤグルマギクやハコベもまた好まれる。ただし、これらは普通、畑の脇に生えていることも多い。したがって、気をつけなければならないことは、これらの餌になる草は、畑作作物に用いた殺虫剤や農薬の掛かって汚染されていないものを摘んで来て与えることが重要である。

衛生管理と一般的な世話

健康なオカメインコの体重は､8週齢までの若いオカメインコで約55～85グラムであり、成鳥の体重はどれもおおよそ 140 グラムである。しかし、内臓にも寄生虫が感染することがあるので、駆虫しないでいると下痢が続いて痩せて死んでしまうことがある。オカメインコに感染しやすい寄生虫は条虫（サナダムシ)、回虫、そして毛頭虫の3種類である。このうち後者の 2 種類が最も多く見られる。毛頭虫は肉眼的に見出すには小さすぎるが、回虫は小さくて白い虫体で体長約13㎜であるので、駆虫薬投与により体外に排出されれば肉眼で見ることができる。

駆虫には水剤の駆虫薬を投薬するが、どのような場合でも病気の治療には、素人判断をしないで、獣医師の診察を受けた方がよい。あなたがオカメインコを単にペットとして鳥かごで 1 匹飼うだけの飼い主であっても、繁殖家としてたくさんの小鳥を飼育している場合であっても、寄生虫の種類によって薬剤が異なり投与量も体重により異なるし、下痢などで体力が低下しているときは体重に合わせて計算した投薬量であって駆虫薬中毒の副作用を起こしやすく、治療事故をおこしてしまう危険もあるので、獣医科病院で治療処置を受けた方が安全で安心である。さらにいえば、鳥の元気がなくなる原因は寄生虫だけではないことからも素人診断は時に危険であることを忘れてはいけない。

オカメインコは水浴びをしないが、週に一度水をスプレーしてやると好んで浴びている。夏には鳥かごは戸外に置くのがよい。鳥は日光をとても喜ぶが、日影も必要なので鳥が太陽を避けられるように鳥かごの半分は影で覆われるようにしてやる。また猫には注意しないといけない。

一般的な世話の基本は、ひとえに鳥かごを清潔に保つということである。これを毎日実施していれば、鳥はいつも健康に毎日を送ってくれるものである。毎日はできなくとも少なくとも週に 1 回は、餌のかす、水、グリット類、それに床敷き（とこじき。新聞紙を床にあわせて折りたたんだもの、あるいは鋏で刻んで床に敷いたもの）を捨て、容器は前部洗って乾かし、改めて新鮮な餌、水、グリット類、床敷きに替えてやる。もっとも、餌やグリット類は汚れてなければ、つぎ足してやるだけでよい。餌の皿の底に日々集まった塵は病原細菌の発生源となるし、暑く湿った夏にはカビの格好の培地にもなってしまい鳥が病気になる原因となる。

止まり木は定期的に、鳥に安心して使えて効果の高い良質の消毒薬の溶液に浸けて消毒処置をした上でよく洗い、乾燥させて取り付け直すようにするのがよい。鳥小屋の場合は

少なくとも年に 2 回は内部を十分に洗浄して壁に付着した糞なども洗い落としたうえで、鳥小屋用の上述と同様に良質の消毒薬を噴霧する。鳥小屋の木の隙間にはダニが結構住んでいるものであり、夜になると鳥の血を吸うために出て来る。本来は小さな灰色のダニだが吸血すれば血で満腹になり赤色のダニに変身する。ダニの吸血により、成鳥でも若鳥でも深刻な病気を起こしうるほど衰弱することがある。

ダニの駆除についても、獣医科病院で適切で安全なダニスプレーをもらうことが出来る。蚊とブヨもまた夏には鳥を吸血するために攻撃してくるので、殺虫スプレーも購入しておくと良い。ただし、蜘蛛は罠を仕掛けて多くの虫を殺してくれるので、助けになる。繁殖期が終わったときに、鳥かごや鳥小屋、さらに巣箱や止まり木は安全で効果のある消毒液を撒布したり、大きな容器にいれた消毒液に 48 時間浸して消毒する。なお消毒の終わった食器類は水道水ですすいで乾燥させてから元の場所に設置する。

病気

寄生虫とは別に、オカメインコの病気の原因で最もよくあるもののひとつがストレスである。小型のオウムであるオカメインコは健康なときは賢く優しいが、体調が悪いときは神経質である。鳥かごで飼われている鳥へのストレスは以下のことによって誘発される。それは、暗い部屋の隅に放って置かれたり、猫あるいは犬に狙われたり、子供に手荒に取り扱われたり、孤独に取り扱われた場合などである。

鳥小屋の鳥の場合は、汚い環境、過密、弱いものいじめをする鳥がいる、猫や犬に狙われるといったことはすべてストレスの要素となる。また、暗闇の中での移動、笛あるいは大きな音や声などの驚愕刺激も大きなストレスを生む。

病気の鳥の見分け方は、元気がないか、食事をしているか、眼は閉じて眠そうな顔か、飛ばずに床の上にいることが多いか、などである。ただし、確認しておくことは、その鳥が雌鳥で卵を孕んでいないかどうか、手袋をして鳥を抱き上げて肛門の周辺と背後を触ってみる。もしなにか体内に塊があるならばそれはおそらく卵である。そのときは、別の鳥かごにその鳥だけをいれて、タオルで覆うなどして鳥かごのなかを少し暗くしてやり、分厚いタオルを敷き、暖房を室温 26.7℃前後になるように調節する。注意すべきは、室温を約 26.7℃以上にしてはいけない。小さいティーカップに砂糖ひとつまみを溶かして約 20℃に温めた砂糖水を 3 時間毎に小さいティースプーンに半分（約 1ml）ほどスポイトを使って飲ませる。もし次の日になっても卵が産まれなければ、腹を両側から肛門に向かって非常に優しい力で圧迫しながら、なでおろしてみるのもよい。もし鳥が苦痛を感じているように見えたら、止めて、後で再び試みなさい。卵が生まれた後の数時間は、鳥がその場所を離れたがる兆候を示すまで、そのまま餌と水を与えて室内に置いて見守ってやる。

オカメインコは眼の病気に非常にかかりやすい。ときどき眼にごみが入っただけでもなる。その場合は獣医科病院で抗生物質の軟膏を処方してもらうと良い。眼の端が暗いピンク色あるいは赤いときはすこし重篤であることを示している。もし肛門から出血している

ならば通過できない何かの物体が引っかかっているのかもしれない。ただちに獣医科病院につれて行きなさい。

過密で、暗い鳥小屋で飼われている鳥は、十分な量の日光(ビタミン D3)、カルシウム、そしてビタミン A が不足するので、クル病になることがある。こうした鳥は力強く飛べないためにいつも柱に掴まっていたり、しかも止まり木をしっかりとつかむことが出来ないで足で立つことが出来ずに自分の足の上の座り込んでいる傾向がある。獣医科病院で治療を受ければクル病が治療できるが、繁殖には使わないほうが良い。ただし、目を閉じて、鼻孔に分泌液が付着して、大きな呼吸をしているような鳥も直ちに獣医科病院に連れて行くべきである。おそらくなにか重大な病気にかかっているであろう。

繁殖

繁殖のためには、鳥小屋の中に１ペアだけの巣を置いてやる。その結果、4 から 6 つの卵が生まれる。卵は 17 日から 21 日で孵化する。雛は、わずかな産毛が生えているがほぼ裸で、眼は閉じられている。受精卵かどうかは光にかざした時に暗く見えれば受精卵である。若い雄鳥は 10 ヶ月齢で交配でき、若い雌鳥は 11 から 12 ヶ月齢で交配できる。適切な大きさの巣箱はだいたい 20cm×22cm×深さ 35cm である。巣箱の出入り口は上の方に開けてやるが、そのすぐ下の内壁にはよじ登って出入り口に出られるにように取り付けておいてやる。これは成鳥だけでなく若鳥が登って外に出ることを可能にするためにも必要である。この柱は一辺が 3.8cm 程度の正方形の柱で、その一辺にはしご状に刻みを横に入れて作り、箱の外側から前縁にネジで取り付けて固定する。巣のなかには木の削りくずを十分に敷き詰めておく。木炭を小片にしたものを混ぜておくと巣箱内の衛生保持にも都合がよい。

交配が初めての若いつがいはしばしば孵化に失敗する。普通では雄鳥が日中に抱卵し、雌鳥は夜の間抱卵する。若い雄鳥はしばしば抱卵に失敗するが、孵化した雛に餌を与えるのは上手であり、すばらしい父親となる。もっとも、若いつがいの場合は出来るだけ邪魔せず、なすがままにしておくのがよい。ただし、巣内の状態を調べたいときには、雄が抱卵しているときよりも雌鳥が抱卵しているときを選んで調べたほうがよい。人が手を入れてきても、雌鳥のほうが雄鳥よりもずっと我慢していてくれる。巣内を調べるときだけでなく抱卵しているときも雛がかえってからも、鳥たちにいつも笛で呼んだり、話かけたりするとよい。そのほうが鳥たちが安心してくれて鳥たちの信頼を生む。

雛は柔らかい食餌を必要とする。明るい色合いのパンをちぎって牛乳に浸し、搾ったものの上に少し強めに加熱して作った目玉焼きの黄身だけを取り出して砕いたものを振りかけてのせたものが最適の餌となる。ただし、それは毎日新しく調理してやることが必要で、特に暑い日には 1 日 2 回は取り替えて与えないとならない。卵の変わりにカナリヤ用の餌（上述）を載せたものも最適である。ひまわりの種子も造血に必要な栄養を供給するので常に供給する。この他にも、新鮮な混合砂（グリット)、牡蠣殻粉砕物、そしてコウイカの骨と新鮮な緑色植物は常に供給する。

若い鳥が初めて巣を離れた時には彼らはたいてい鳥小屋の網に飛び乗り、それからどうしようもないといった感じで、他に場所へ降りていくかそこを登っていく。雛の行動がこのように活発になり始めたときは、猫などに襲われやすいときでもあるので、小屋を丈夫な網目の小さな金網で二重に覆ってやることもよい。巣から出たばかりの雛は風や雨を受けないような場所に止まり木を置いてやるのがよい。

オカメインコの足は成長につれて短く太くなるので、金属足環はつけないほうがよい。若鳥のうちにつけると成長して大きな苦痛となる。むしろプラスチック製リングならばいつでも取り外せるので、まだましである。それでもつけないで住むならば着けないほうがよい。

雛は 8 日齢で目が開く。6 週齢になると巣離れする。鳥小屋の巣の数を増やしてやる。ふつうは、若鳥用に 1 つ、両親用に 1 つ、それまでにいる年長の鳥用に 1 つの 3 つの巣を与えるとよい。成鳥の雄が美しくさえずっていると、若い雄も約 8 週齢でさえずり始める。もっとも、もう少し遅いものもいる。雌は非常に若い時に少しだけさえずるのみである。

終わりにあたり、すばらしいペットであるオカメインコの魅力を理解していただけたならば幸いである。この記述をきっかけに、もっと多くの別の著者による飼育教則本も読んでいただいて、オカメインコ博士がたくさん出現してくれることを願う。